赴任後、１年間経って思うこと

下関市立安岡小学校　教諭　櫻井　紀邦
（令和２年度派遣　中華人民共和国　蘇州日本人学校）

１．赴任時の体験が今に生きていること

帰国してからもうすぐ１年になります。赴任時に行っていた業務については、帰国後に直接役立っていることは、実はあまりありません。私が赴任していた３年間は、コロナ禍の３年間とぴったり重なりますし、特に中国ではゼロコロナ政策が実施されていたこともあって、その対応に追われた３年間でした。PCR 検査の対応やオンライン授業の運営やコツ等、現在私が日々している仕事には必要ないので、それはそうです。

では、３年間の蘇州日本人学校の経験が全く役立っていないかというとそうではありません。一番大きい変化は、私の心の構えといったようなものです。どういうことかと言いますと、自分とは全く異なった立場の人々について、自分だったらどうだろうと置き換えて考えることの大切さが赴任前に比べて数段深く心の中に沁み込んだような気がしているのです。もちろん、当たり前のことですし、今までもそのように心掛けてきたつもりではあるのですが、やはり現地で数年間生活することによって見えてくることがありました。逆に言うと、日本にいながらして、世界のそれぞれの地域で生きる人々の心や考え方や思いは、いくら報道を注意深く聞き、情報を集めても分からない領域がかなり大きいはずという実感が得られたように思うのです。私たちは、分からないところがたくさんあるままで決めつけたり、判断したりしてしまいがちです。日中関係では特に顕著かも知れません。時には、分からないことがあるのは承知で判断しないといけないこともあるでしょう。いずれにしろ、他人の立場でものを見て、考えて、感じることの難しさと大切さを私自身が再認識したことが、３年間の海外赴任を通しての私にとっての最大の収穫ではないかと思っています。

他人の立場に自分を置いてみて、考えること。児童も小さい頃から親や保育士さんからも教えられていることでしょう。それを、自分の学級の友達だけではなく、隣のクラスや他の学年の子供たちにも広げ、学校で働いている方々に広げ、地域の方々にも広げる。そして、日本の他の地域で暮らす人々にも、世界の様々な国々で暮らす人々にも広げる。そして、文化も、宗教も、年齢も性別も異なり、貧富の差もある、自分とは全く異なる人々の立場に自分を置いて感じ、考えようとする。そのきっかけを与え、導いていくことが初等教育においてとても大切なことだと心底思うようになりました。世界中で分断が進み、これからの世界がどのようになっていくのか先が見えない今だから、なおさらです。在任中、また帰国後は特にこうした思いが私の中に深く根をおろすようになり、日々の授業や学校生活において、子供たちへの言葉掛けが変わってきていることを感じます。

２．思い出

最後に、気楽に思い出は？と聞かれたらすぐに浮かぶのは以下の２つでしょうか。１番は、担任したクラスの子供たちです。コロナ禍の中国ということで、渡航等の制限による様々な事情がどの子にもあり、そして校外学習がほぼできなかったこともあって、それぞれの子供たちとの教室内での濃い関わりが大変印象深く残っています。

２番は、お茶です。未だに中国茶を日常的に楽しんでおります。持って帰った茶葉と茶器で、中国でのお茶体験を懐かしく思い出しながら、飲んでいます。